教師の資質についての一考察

―本学学生の自己評価を中心に―

松本　幸子

平成25年度より設置された、教職科目「教職実践演習（中等）」で初年度に実施したアンケート調査より見られた、教科内容等の指導力に関する項目の『板書、話し方、表情など授業を行う上での基本的な表現力を身につけることができましたか。』の評価が低い原因を探ることとした。まず、振り返り授業を行い、補充するべき原因を調査し、対策を検討し26年度27年度と行ったアンケート調査の結果を分析した。更に、対策方法をこれからの指導に活かす為に資料としてまとめ考察することを目的とした。結果、一定の基準を定め、最低限教育実習に行く為の知識・能力・コミュケーション力等々を身につけたかの確認を行なう機会をもうけることが、重要であることが分かった。

キーワード：教師　資質　教育　確認

1．目的

はじめに、「教職実践演習」科目の概略は、教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令（平成20年文部科学省令第34号）により、2010（平成22）年度以降の大学入学者の教職課程の「教職に関する科目」として、「教職実践演習」が新設された。その趣旨として、教職実践演習は、教職課程の他の授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものであり、いわば全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」として位置付けられるものである。学生はこの科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待される。

東京家政学院大学 現代生活学部 生活デザイン学科

次に、このような科目の趣旨を踏まえ、本科目には、教員として求められる以下の4つの事項を含めることが適当である。

①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項
②社会性や対人関係能力に関する事項
③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項
④教科・保育内容等の指導力に関する事項

また、本科目の企画、立案、実施に当たっては、常に学校現場や教育委員会との緊密な連携・協力に留意することが必要であるとされている。

そこで、教職科目の最終科目を終えて各自が教師としての資質について、どのように評価確認が見られたかアンケート調査を設置された25年度より毎年行ってきている。初年度の結果より評価が低い項目の対策を行った結果について改善されているかを確認することと、更に問題があるかを確認し、3年間の経過をまとめ考察することを目的とする。

2．方法

2－1　アンケートによる調査

文部科学省が25年度より設置した科目の内容

として掲げている項目に沿ったアンケート内容で、各自自身が教師としての資質が身についたかについて評価するアンケート調査を行った。アンケート内容は以下の通りである。

A教員としての使命感や責任感、教育的等に関する項目について

①教育に対する使命感や情熱を持ち、常に子どもから学び、共に成長しようとする姿勢が身に付いたと思いますか。

②高い倫理観と規範意識、困難に立ち向かう強い意志を持ち、自己の職責を果たす事ができると思いましたか。

③子どもの成長や安全、健康を第一に考え、適切に行動することができますか。

B社会性や対人関係能力に関する項目について

①教員としての職責や義務の自覚に基づき、目的や状況に応じた適切な言動をとることができますか。

②組織の一員としても自覚を持ち、他の教職員と協力して職務を遂行することができますか。

③保護者や地域の関係者と良好な人間関係を築くことができますか。

C生徒理解や学級運営等に関する項目について

①子どもに対して公平かつ受容的な態度で接し、豊かな人間的交流を行うことができますか。

②子どもの発達や心身の状況に応じて、抱える課題を理解し、適切な指導を行うことができますか。

③子どもとの間に信頼関係を築き、学級集団を把握して、規律ある学級経営を行うことができますか。

D教科・保育内容等の指導力に関する項目について

①教科書の内容を理解しているなど、学習指導の基本的事項を身に付けられましたか。

②板書、話し方、表情など授業を行う上での基本的な表現力を身につけることができましたか。

③子どもの反応や学習の定着状況に応じて、授業計画や学習形態等を工夫することができますか。

実施時期は、毎年後期の教育現場の施設等の見学後に実施している。人数は4年次の履修者で25年度履修者は11名、26年度履修者は12名、27年度履修者は9名であった。

「教職実践演習（中等）」の初年度概要と目的および授業内容は以下の通りである。

概要：教員免許の取得を目指す学生に対して、教員として教育の理念を学ぶとともに、実践的な指導力を身に付け、それを向上させることを目標とする。実際の教育現場の高校見学訪問などの現場を体験し、携わっている教諭の方々からの教育に対する考えなどの生の声を伺うことにより、教員としての心構えなどを再認識して、教職について深く理解することを目的としている。

目的：教職資格にかかわる内容の総まとめとしての位置付けである。教員としての使命感・責任感を持てるようにする。さらに経験を活かして教育現場での問題解決能力を身に付け、教員としての資質の最終確認をする。

表1：授業内容

1	オリエンテーション
2	教職の意義と教師の役割
3	履修カルテに基づき自己の課題確認
4	履修カルテに基づき自己の課題確認
5	教育実習での研究授業の振り返り模擬授業
6	教育実習での研究授業の振り返り模擬授業
7	教育実習での研究授業の振り返り模擬授業
8	教育実習での研究授業の振り返り模擬授業
9	模擬授業についてのグループ討論
10	模擬授業についてのグループ討論
11	教育現場の実地調査研究
12	教育現場調査報告
13	教職経験者の特別授業
14	教師としての資質の最終確認
15	教職実践演習で学んだこと　レポート

2－2　実習前後についての調査

教育実習に行く前の準備について教員側の指示に対して、各自が行った準備についての方法と報

告についての調査を行なった。更に、実際の教育実習での授業状況を把握するため、実習後各自が行った研究授業又は、中高等学校で行った授業を振り返り授業として行ない調査及び評価を行なった。大学の授業時間の日程上１人 30 ～ 40 分の短縮版の授業時間とした。

３．結果

３－１　アンケート結果

総合的にまず全体を表２とグラフ（表2、図１・図２・図３）で３年間の傾向をみると 25 年度の各自の評価は非常に身につき理解でき、行動ができると、ややの回答を合わせると比較的理解でき身ついた評価が 96.2％にも及んでおり、自己評価はとても高い。26 年度は、前年度とほぼ評価は似通っており、低い評価が無くなり、非常にと、やや理解でき、行動できた評価が 90.9％となり、どちらでもないが 11.1％（1 名）となり、自己評価は高い結果であった。27 年度の評価は、全体の評価が低く、非常にとやや理解でき、身についたという学生は、77.8％と低下している。また、あまり身につかず具体的な行動が取れなかったと評価している学生がＢ、Ｄ項目の小項目中に全体で 3.7％（延べ４人）いることが分かった。更にどちらでもないと言う回答者が全体の項目に 18.5％（延べ 20 人）もおり、全体に各自の自己評価は厳しい結果であった。この様々な「どちらともいえない」結果が表れた 27 年度を詳細に検討してみるために、図４：評価値の比較を見てみると、Ｂ社会性や対人関係能力に関する項目についての、『①教員としての職責や義務の自覚に基づき、目的や状況に応じた適切な言動をとることができますか。』と『③保護者や地域の関係者と良好な人間関係を築くことができますか。』とＣ生徒理解や学級運営等に関する項目についての、『②子どもの発達や心身の状況に応じて、抱える課題を理解し、適切な指導を行うことができますか。』と、Ｄ教科・保育内容等の指導力に関する項目についての、『①教科書の内容を理解しているなど、学習指導の基本的事項を身に付けられましたか。』と『③子どもの反応や学習の定着状況に応じて、授業計画や学習形態等を工夫することができますか。』が、評価平均値の理解度より下回っている結果である。その中でも、Ｂ項目の③は保護者との接点を体験する機会は教育実習の期間内にあまり行なわれることが少ないことが想定できるため、低い結果であると言える。次にＢ項目の①は、具体的にどのような事柄がこの項目に該当するかということが明らかには理解することは難しい内容であったと考えられる。次にＣ項目の②とＤ項目の③の内容はこれも短期間の間に心身の状況や学習の定着状況を判断することは、容易にできることではない項目であったと考える。

最後にＤ項目の『①教科書の内容を理解してい

表２　アンケート結果の割合

単位：％

項目		項目A			項目B			項目C			項目D			合計%
質問		①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	
非常に身につき理解でき行動ができる	25年度	36.4	54.5	36.4	54.5	45.5	45.5	9.1	54.5	45.5	45.5	63.6	54.5	45.5
	26年度	58.3	25.0	75.0	16.7	58.3	8.3	33.3	16.7	25.0	33.3	66.7	16.7	36.1
	27年度	44.4	33.3	55.6	11.1	66.7	22.2	33.3	22.2	11.1	11.1	33.3	11.1	29.6
	平均	46.4	37.6	55.6	27.4	56.8	25.3	25.3	31.1	27.2	30.0	54.5	27.4	
やや身につき理解でき行動ができる	25年度	63.6	45.5	63.6	45.5	54.5	45.5	90.9	45.5	54.5	27.3	27.3	45.5	50.8
	26年度	41.7	58.3	25.0	83.3	41.7	75.0	58.3	66.7	41.7	58.3	33.3	75.0	54.9
	27年度	55.6	33.3	33.3	55.6	11.1	44.4	66.7	33.3	77.8	55.6	55.6	55.6	48.1
	平均	53.6	45.7	40.7	61.4	35.8	55.0	72.0	48.5	58.0	47.1	38.7	58.7	
どちらとも言えない	25年度	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	9.1	0.0	0.0	0.0	27.3	0.0	0.0	3.0
	26年度	0.0	16.7	0.0	0.0	0.0	16.7	8.3	16.7	33.3	8.3	0.0	8.3	0.7
	27年度	0.0	33.3	11.1	33.3	11.1	22.2	0.0	44.4	11.1	33.3	0.0	22.2	1.9
	平均	0.0	16.7	3.7	11.1	3.7	16.0	2.8	20.4	14.8	23.0	0.0	10.2	
あまり身につかず理解・行動ができない	25年度	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	9.1	0.0	0.8
	26年度	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	27年度	0.0	0.0	0.0	0.0	11.1	11.1	0.0	0.0	0.0	0.0	11.1	11.1	0.9
	平均	0.0	0.0	0.0	0.0	3.7	3.7	0.0	0.0	0.0	0.0	6.7	3.7	
ほとんど身につかず、理解行動ができない	25年度	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	26年度	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	27年度	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平均	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	

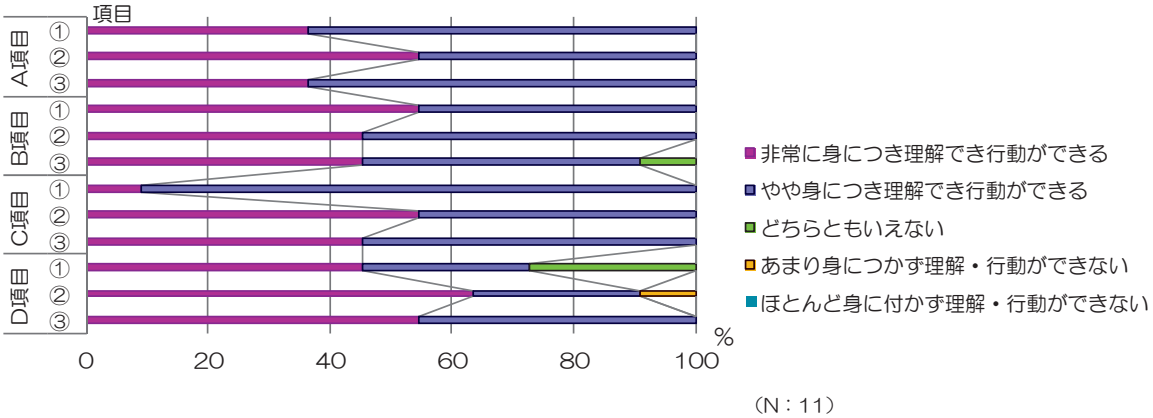

図１　25 年度の各自の評価の割合

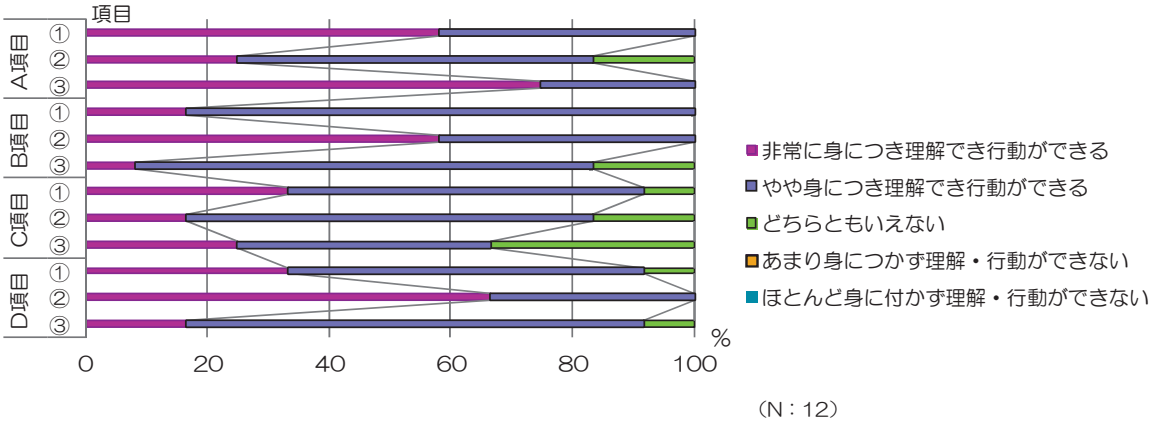

図２　26 年度の各自の評価の割合

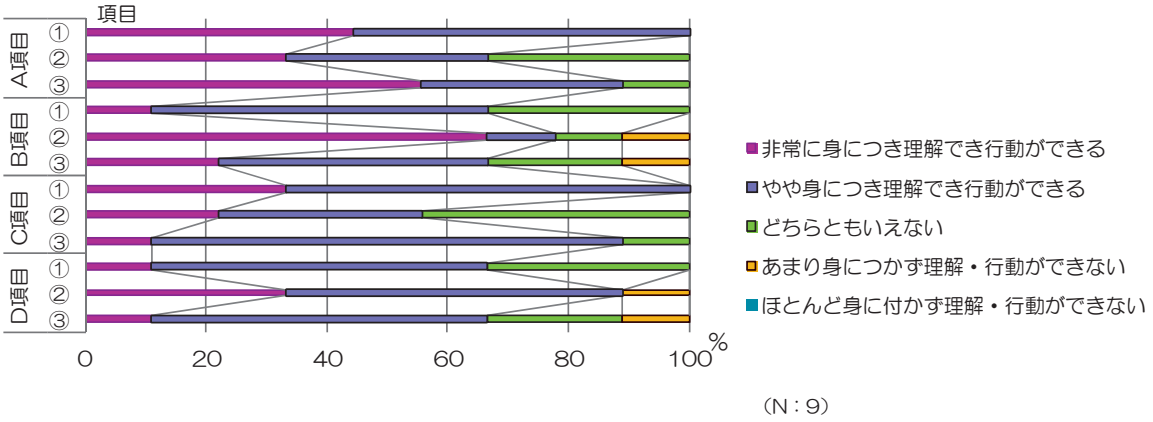

図３　27 年度の各自の評価の割合

るなど、学習指導の基本的事項を身に付けられましたか。』について評価は低くかった。25年度に評価が低い項目であった、D『②板書、話し方、表情など授業を行う上での基本的な表現力を身につけることができましたか。』の内容よりも大学の授業内容では、確実にできるように力を入れている項目であった。2年次から教育実習に行く為の専門科目が多数あり、シラバスを見ても、学習内容と課題・教材研究・授業計画・指導教材研究・家庭科の学習指導要領と目標・内容・教材の開発・授業計画と学習指導案の作成・教材と学習方法など、実際の授業に必要な内容が連なっており、実際に充実した内容になっている。それらを勉学し資料を作り、指導案を作成し教授用掲示物・試作教材等々も制作し模擬授業を何回と体験し4年次に教育実習に行っているのが現状であるが、このような結果であった。

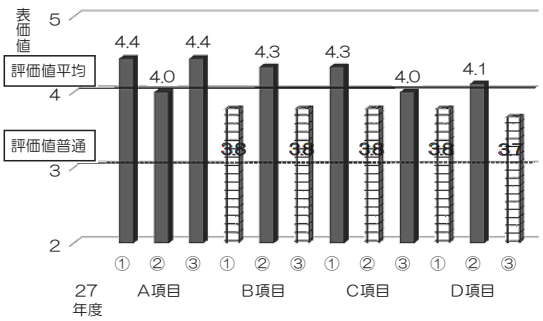

図4　27年度の評価値の比較

3－2　実習前後の準備と振り返り授業の結果

初年度のアンケート結果より、D教科・保育内容の指導力に関する項目の『②板書、話し方、表情など授業を行う上での基本的な表現力を身につけることができましたか。』に低い評価が見られた。その対策として、各自が教育実習校で担当する授業内容が決まり次第、関連する教員に必ず指導を仰ぎ、準備をすることを指導した。結果、ほとんどの学生が専門分野の教員の指導を受けてないことが、教員側への聞き取り調査で明らかになった。この結果を受けて、26年度は振り返り模擬授業を行う事とし、学生が実際に近い環境の中で、どのように授業を行っているか調査することにした。

結果、指導を受けた、専門分野の先生方からの実態や問題点も調査した。準備を丁寧に標本・資料つくりなどに時間をかけて実習に行った学生もいることが把握できた。しかし、振り返り授業での調査では、準備不足を感じる学生も見られ、自分の言葉で授業ができる指導が必要であるという、結果であった。

そこで、27年度は振り返り授業も引き続き行い、実習に行く前の準備期間に、最低の相談指導回数とその内容についてメール報告を義務付けた。また、教育実習での内容が決まり、準備期間に各分野の先生に相談に行く段階で、準備をすることを繰り返し指導した。その結果、各自が考え検討し準備したものを相談することができるようになった。そこから教員のアドバイス、指導があり、準備も前年度より良くできるようになったことが、他学科の保育や福祉の専門分野の指導を受けた先生からも、「よく調べて来ての質問で、とてもよく準備をしている」と、お褒めの言葉を得ることができた。各専門分野の指導にかかわった先生方からの聞き取りも行った結果、最初は準備不足で相談に来る学生もいたが、回数を重ねるたび調べ考えての質問に変化した調査内容であった。このことは、評価していい事柄と考える。

3－3　振り返り授業について

授業時間の制限があり、本来の中高等学校での授業時間である50分の授業は難しい現状であったため、40分の授業で、受ける生徒数も少なく、また同級生で理解をしているという条件で行った。準備を同じように行い、各自がそれぞれ担当者への評価も行い、教員側も同じく評価を行った結果、前年度より、資料の準備不足は少なく授業を行う雰囲気がとても明るく、コミュケーションをとる努力が見られた。例えば、自分の経験談を交えたり、有名なアメリカ大統領を例えにしたり、高校生の身近なスマホを内容に取り入れたりと、分り易く興味を引くようにと、授業に注目させる創意工夫が見られた振り返り授業であった。授業形態は、教科書の穴埋め的な授業が多かったこと

に比べると他の資料等を活用し、考えさせる生徒主体の授業に変わってきていた。しかし、一部ではあるがまだ、メモやノートを常に見てしまう学生もいた。全体的に明るく声は良く聞こえ、問いかける事が出来ていたようである。しかし、少しくだけすぎる点も感じられたが、全体には、低かった表現力は、成長が見られた。

４．考察

以上のような結果より考えられる事は、毎年様々な学生が履修することにより、指導展開もかえる必要があると考える。しかし、一定の基準を定め、最低限教育実習に行く為の知識・能力・コミュケーション力等々を身につけて、実習に向かうことが大切と言える。それには教員側の細やかな指導が必要で、基本的な実習ノートのまとめ方から指導案作成、資料探しとその作成、更に実験実習の練習や部分標本等々の試作作りなどで、細部にわたり指導が必要である。

その外に、生徒とのかかわりや、中高等学校における全体の教員としての仕事に対しても、指導が必要である。これらは、現職の教員として活躍されている先輩に指導を仰ぎたいと思う。また、ある高等学校などの校長を経験された専門分野の先生の言葉として、「教育実習生として実習に行くときは、受け入れてくださる中高等学校に感謝し、授業を受ける子どもたちにとっては、一生にその時の時間はもどってこない大切な時間であることを考え、真剣に取り組んで最大の努力をしてほしい」という講話を聞いたことがある。このような気持ちまで高めることも大切なことである。

この３年間のアンケート調査では、自己評価は27年度の３年目はあまり良い傾向ではなかった。推測ではあるが、模擬授業の表現力もよくなっていた結果を見ると自分に厳しくなったと違う見方もできるのではなかと考える。これからさらに成長することを期待し、教員側の１つ１つの指導の大切さを痛感し小さな事を大切にし、学生に接していくことが重要である。何事にも理解しているかの確認をしていくことが要であると感じた。

最後に、この授業は、佐藤広美、山田順子（27年度退職）、杉本茂（26年度退職）、藤田恵子、山﨑薫の共担である。アンケートも担当者の合意の上で行ったものである。アンケート分析については、了解を得て、筆者個人の責任において、まとめたものであることを付け加える。

謝辞

担当責任者佐藤広美先生には、ご指導を頂き感謝申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

(1) 文部科学省ホームページ：http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06071910/014.htm（2013.5.22）
(2) 西岡加名恵、石井英真、川地亜弥子、北原琢也：『教職実践演習ワークブック』㈱ミネルヴァ書房（2013.6.10）
(3) 梨木昭平：『教職実践演習』㈱大学教育出版（2013.6.10）
(4) 松本幸子：教師としての資質の確認―「教職実践演習」科目の現地調査を中心に―　東京家政学院大学紀要　第54号（2014）P79～86
(5) 東京家政学院大学『授業計画』平成27年度（2015）P351,352,353
(6) 東京家政学院大学事務局：『東京家政学院大学学生便覧平成25年度』（2013.4.1）

（受付　2016.3.15　受理　2016.7.11）